

1. はじめに

波動伝播解析の分野において、弾性問題については数値解析によって実際の応用問題を解くための指針は一定確立されているようである。しかし粘弾性波伝播問題についてはいくつか試みられているが、有限要素法あるいは差分法など数値近似解を得るための重要な条件である空間分割、時間分割についての一般的、統一的な安定性の条件を示したものは見あたらないようである。

こゝでは二次元粘弾性波動伝播解析と差分近似の逐次積分による行方の場合の安定性の条件を最も簡単な Voigt 体に対して考察を行なう。

2. 波動方程式

弾性体の運動方程式は物体力を無視するとテンソル表示を用いて次式で表わせる。

$$\rho \text{div} \text{div} U_i = (\lambda + \mu) \text{div}_i U_j + \mu \text{div}_j U_i \quad i, j = 1, 2, 3 \quad (1)$$

こゝに  $\rho$  は密度、 $\lambda, \mu$  は Lamé の定数、 $U_i$  は変位ベクトル、 $\text{div}_i U_j = \partial U_j / \partial x_i$  である。粘弾性体と Voigt 体とを規定すると粘性係数  $\lambda', \mu'$  を用いて (1) の代りに次式を得る。

$$\rho \text{div} \text{div} U_i = \{(\lambda + \mu) + (\lambda' + \mu') \Delta\} \text{div}_i U_j + \{\mu + \mu' \Delta\} \text{div}_j U_i \quad (2)$$

いま  $U_i$  をスカラー関数  $\varphi$  とベクトル関数  $\psi_k$  に表わすと (2) は次式るとき満足される。

$$\rho \text{div} \text{div} \varphi = \{(\lambda + 2\mu) + (\lambda' + 2\mu') \Delta\} \text{div} \text{div} \varphi \quad (3.a), \quad \rho \text{div} \text{div} \psi_k = \{\mu + \mu' \Delta\} \text{div} \text{div} \psi_k \quad (3.b)$$

こゝで (3.a) を  $C_1^2 = (\lambda + 2\mu) / \rho, C_1'^2 = (\lambda' + 2\mu') / \rho$  とし通常に 2次元表示で書くと次式となる。

$$\frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} = C_1^2 \left\{ \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial y^2} \right\} + C_1'^2 \left\{ \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2} + \frac{\partial^2 \varphi}{\partial x^2 \partial y^2} \right\} \quad (4)$$

3. 差分式化

(4) を逐次積分を行なうための explicit type の次式のような差分式に置き換える。

$$\varphi_{j,k}^{n+1} = 2\varphi_{j,k}^n - \varphi_{j,k}^{n-1} + C_1^2 \left\{ m_x^2 (\varphi_{j+1,k}^n - 2\varphi_{j,k}^n + \varphi_{j-1,k}^n) + m_y^2 (\varphi_{j,k+1}^n - 2\varphi_{j,k}^n + \varphi_{j,k-1}^n) \right\} + C_1'^2 \left\{ \frac{m_x^2}{\Delta t} (\varphi_{j+1,k}^n - \varphi_{j+1,k}^{n-1} - 2\varphi_{j,k}^n + 2\varphi_{j,k}^{n-1} + \varphi_{j-1,k}^n - \varphi_{j-1,k}^{n-1}) + \frac{m_y^2}{\Delta t} (\varphi_{j,k+1}^n - \varphi_{j,k+1}^{n-1} - 2\varphi_{j,k}^n + 2\varphi_{j,k}^{n-1} + \varphi_{j,k-1}^n - \varphi_{j,k-1}^{n-1}) \right\} \quad (5)$$

こゝに  $m_x^2 = \Delta t^2 / \Delta x^2, m_y^2 = \Delta t^2 / \Delta y^2, x = m \Delta x, z = j \Delta x, y = k \Delta y$  である。

4. 安定性の条件

いま任意の実数  $d, \beta$  に対して  $\varphi_{j,k}^n = \xi^n \exp i(dj \Delta x + \beta k \Delta y)$  と書けるとすると (5) は次式となる。

$$\xi^{n+1} = 2\xi^n \{ 1 - 2\eta (C_1^2 + C_1'^2 / \Delta t) \} - \xi^{n-1} \{ 1 - 2\eta C_1'^2 / \Delta t \} \quad (6)$$

こゝに  $\eta = m_x^2 \sin^2(d \Delta x / 2) + m_y^2 \sin^2(\beta \Delta y / 2)$  である。

こゝで  $\xi^{n+1} = \xi^n$  (i.e.,  $\xi^{n+1} = \xi^n$ ) とおくと

$$\begin{Bmatrix} \xi^{n+1} \\ \xi^{n+1} \end{Bmatrix} = [G] \begin{Bmatrix} \xi^n \\ \xi^n \end{Bmatrix} \quad \text{を満足する amplification matrix } [G] \text{ は (6) の 2 次式となる。}$$

$$[G] = \begin{bmatrix} 2\{1 - 2\eta(C_1^2 + C_1'^2 / \Delta t)\} & -\{1 - 2\eta C_1'^2 / \Delta t\} \\ 1 & 0 \end{bmatrix} \quad (7)$$

(7) の固有値を  $\lambda_i$  とするとき spectral radius を  $R(\Delta t, \alpha, \beta) = |\lambda_i|_{\max}$  とすると von Neumann の安定性の必要条件は  $R \leq 1 + O(\Delta t)$

と与えられる。弾性体の場合にはこの条件は次式となる。

$$C_1^2 \Delta t^2 (\frac{1}{2} \alpha^2 + \frac{1}{2} \beta^2) \leq 1 \quad (8)$$

ここで簡単のために Voigt 体の  $\lambda/\lambda = \mu/\mu = \tau$  の最も簡単な形で表わせば、 $\Delta x = \Delta y$ ,  $c/\Delta t = \tau$  とすると  $C_1^2 = \tau C_1^2$  とするから (7) より

$$\lambda_i = \left\{ 1 - 4\alpha C_1^2 m^2 (1+r) \pm \sqrt{1 - 4\alpha C_1^2 m^2 (1+r)} - 1 - 4\alpha C_1^2 r m^2 \right\} \equiv A \pm \sqrt{D} \quad (9)$$

ここで  $A = \rho i \pi^2 (d\Delta x/2)$ ,  $m^2 = m_x^2 = m_y^2$  とある。

1)  $D \leq 0$  のとき

$$\text{すなわち } m^2 \leq (2+r) / (4\alpha C_1^2 (1+r)^2) \quad (10)$$

$0 \leq A \leq 1$  とあるから (10) より

$$\Delta x \geq \frac{2C_1(1+r)}{(2+r)^{1/2}} \Delta t \quad (I)$$

$|\lambda|_{\max} = \sqrt{|\lambda|^2} \leq 1$  の条件を求めると次式となる

$$\Delta x \geq \frac{2\sqrt{2}C_1(1+r)}{(4+3r)^{1/2}} \Delta t \quad (II)$$

2)  $D > 0$  のとき

$$(i) A \geq 0 \text{ すなわち } \Delta x \leq 2C_1\sqrt{1+r} \Delta t, \quad (III)$$

のとき  $R \leq 1$  は恒等的に満足される。

(ii)  $A < 0$  のとき  $R \leq 1$  は次式となる。

$$\Delta x \geq C_1\sqrt{2+3r} \Delta t \quad (IV)$$

以上より  $\Delta x_{(III)} > \Delta x_{(II)} > \Delta x_{(IV)}$  とあるから (5) で示される差分式に対しては安定性の必要条件は (IV) となる。この例題を高温硬化工ホキシの  $\tau = 4.44 \mu\text{sec}$  に対して示したものが図-1 である。この図には同じ  $\tau$  に対して  $C_1 = 1.688 \text{ m/sec}$  の場合の数値実験の結果も示した。step 数をさらに増加した場合については現在研究中である。図-2 には (IV) について  $\tau$  の影響を示したものである。この結果によると  $\tau$  の増加に伴って実際計算に用いることのできる  $\Delta x$  の小さな範囲では  $\Delta t$  が著しく小さくなり、差分解析に不利な点が多い。なお (3-b) から同様に求まる条件は横波に特有なものであるから (IV) に十分である。

1) 参考として、W. Maier & J. Connor, "Finite Element and

Dynamic Viscoplasticity," ASCE, EM4, pp. 1145-1158, (1971),

2) Lax & Richtmyer, "Survey of the stability of Linear Finite Difference Equations," Comm. Pure Appl. Math. 1x, pp. 267-293 (1956)

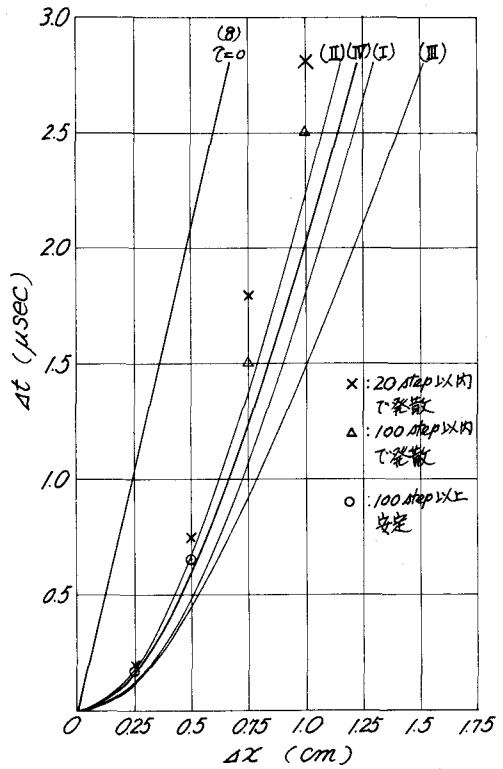


図-1  $\tau = 4.44 \mu\text{sec}$ ,  $C_1 = 1.688 \text{ m/sec}$

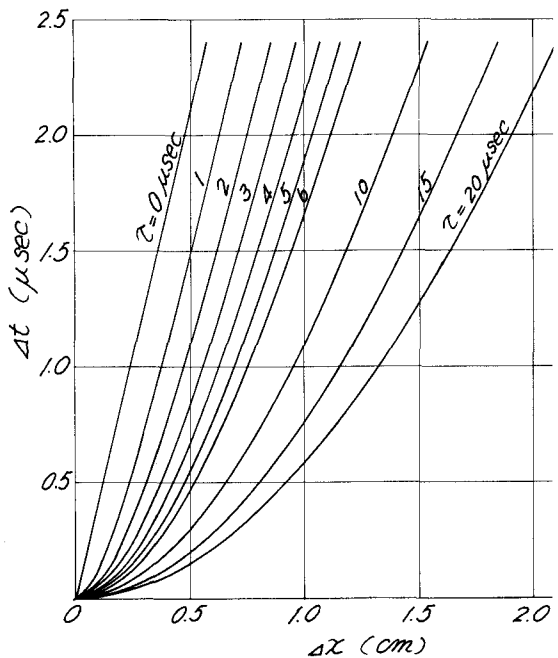


図-2  $C_1 = 1.688 \text{ m/sec}$ . (IV)